

1. 件名

調査① NEDO マネジメントから見た研究開発プロセスのロジックモデルの検討

2. 背景・目的

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(以下「NEDO」という。)では、NEDO が実施した研究開発プロジェクトの開発成果が社会にもたらした効果・便益を把握し、その内容を説明可能な形で整理することにより、NEDO 事業に係るアカウンタビリティの向上を図るとともに、今後のプロジェクトマネジメント及び企画立案機能の高度化に資することを目的として、2004 年度以降、プロジェクト終了後を対象とした追跡調査・評価(追跡アンケート調査、インタビュー、ケーススタディ等)を継続的に実施してきた。

近年では、EBPM の推進を背景として、公的資金の配分機関に対しても、研究開発投資がどのような成果や社会的価値を生み出したのかを説明することに加え、その成果に至るまでのプロセスや貢献を説明することへの期待が高まりつつある。

NEDO においても、これまでの追跡調査により研究成果や実用化・事業化の状況に関する情報を蓄積してきたが、それらは主としてプロジェクト終了後の情報に基づくものである。そのため、NEDO のマネジメントが研究開発主体の行動や意思決定にどのような変化をもたらし、その変化が研究開発活動の前進や成果創出にどのように寄与しているのかといった、NEDO の付加価値を構成する要素や貢献については、データ活用の観点から十分に把握・整理されていない。

本調査では、NEDO が研究成果そのものではなく、研究開発主体の行動や意思決定を変えることで成果創出に寄与していることを初期仮説とした概念整理を目的に、その貢献を観測可能な形とするための検討を行う。

3. 内容

本調査では、以下の調査項目を実施し、NEDO のマネジメントと研究開発活動との関係性及びその変化プロセスをロジックモデルとして構造化するとともに、研究開発主体に生じる行動変容とその効果を把握・検証するための基本的な考え方を整理する。

3.1 国内外動向及び事例調査と NEDO マネジメントの位置づけに関する整理

- 国内外の公的機関・資金配分組織等におけるマネジメントや介入施策の効果検証やフィードバックの運用について、動向及び事例を調査する。
- NEDO が保有するデータ内容・種類の棚卸を行い、本調査の目的に照らして目指す方向性に対して、現状の情報収集の課題やギャップをレビューする。対象範囲は、プロジェクト企画立案から追跡調査の範囲を想定する。これらの範囲において、基本計画、提案書様式、中間・事後評価資料及び様式、過去のアンケート調査票・回答データ、「NEDO 実用化ドキュメント」、「NEDO 研究開発マネジメントガイドライン」、「プロジェクトマネジメントの進化に向けて」などを俯瞰し、必要に応じて集計・解析等の分析を行うこと。

- NEDO が実践するもしくは目指すマネジメントの実態を把握するため、デスクトップ調査もしくはアンケートやヒアリングを介して情報収集・分析を行う。
- 動的な EBPM (Evidence-Based Policy Making) や EBM (Evidence-Based Management) の現状・課題を整理し、本調査での実施事項の位置付けを他の事例から相対化しつつ、明確化する。

3.2 マネジメントに関するロジックモデルの枠組みの整理

- マネジメントのロジックモデルでは、開発成果そのものではなく、研究開発の実用化を進める上で組織・人の行動変容及び研究開発活動の前進や改善に着目し、NEDO のプロジェクト企画立案・運営・フォローアップにおける働きかけがどのような変化を生み出すのかを整理する。
- この枠組みでは、イベントの時系列を踏まえつつ、NEDO 施策、行動変容、研究開発活動への効果及び研究開発のパフォーマンス指標を要素として組み込むことを想定し、それらの関係性及び研究開発活動の改善に至る変化プロセスを表現するロジックモデルの骨格を整理すること。

3.3 マネジメントに関するロジックモデルの詳細化検討

- NEDO のマネジメント施策による働きかけの対象となるステークホルダー、行動変容、研究開発活動への効果及び研究開発パフォーマンスについて類型化し、構成要素を整理する。
- 類型化した各要素について、対応関係及び変化プロセスを整理し、研究開発活動の改善に至る因果構造の仮説としてまとめる。その際、行動変容及びその効果を観測可能なものとするため、研究開発パフォーマンスを定性的・定量的な指標として表現することを検討する。

3.4 マネジメントの直接効果に関する検証手法の概念設計

- 研究開発プロセスへの働きかけを通じて創出される NEDO マネジメントの付加価値を把握するための効果検証の考え方を整理する。この際、従来の NEDO 追跡アンケート(プロジェクト終了後に実施)の既存の設問・選択肢の内容との差異を含めて整理する。
- NEDO への参加有無による差異(制度価値)と、参加後のマネジメントの差異(施策価値)を区別して評価するための分析の枠組みを検討する。
- 行動変容や研究開発のパフォーマンス指標などの関係を踏まえ、必要な取得情報、取得手段、取得頻度及び分析手法を整理する。

4. 調査期間

NEDO が指定する日から 2027 年6月30日まで

5. 報告書

- 2026 年度終了時には、中間調査報告書を、2027年度終了後には調査報告書を所定の期日までに提出
- 記載内容:「成果報告書・中間年報の電子ファイル提出の手引き」に従って、作成の上、提出のこと。

<https://www.nedo.go.jp/itaku-gyomu/manual.html>

6. 報告会等の開催

- 進捗の報告:調査の進捗状況は、NEDO との定例会議として 1～2 回/月程度とする。
- 連携会議の実施:「調査① NEDO マネジメントから見た研究開発プロセスのロジックモデルの検討」と「調査② 社会実装観点から見た研究開発プロセスのロジックモデルの検討」の関係者での定期的な進捗報告及び意見交換の場を開催する。
- NEDO 内でのヒアリングや報告の実施:NEDO 職員へのヒアリングや有識者を交えた検討委員会を設置し、報告を依頼することがある。
- 報告会等の開催:委託期間終了後に、成果報告会における報告を依頼することがある。

7. その他

- NEDO から提供するデータのうち、電子媒体等に格納して提供するものについては、調査完了日までに NEDO に返却すること。また、提供データを保存したパソコン内から本調査内で作成したデータを含めて、全て削除し NEDO へ報告すること。
- 本仕様書に定めなき事項については、NEDO と実施事業者が協議の上で決定するものとする。